『草枕』の「意識」

Junko Higasa

夏目漱石の特殊能力は「超速読解吸収応用力」だと思う。「一を聞いて十を知る」という言葉があるが、会話でも読書でも、漱石の頭脳は柔軟なスポンジが水を吸収する如く「無意識に」瞬時に焦点を探り当てて深く吸い込み、全身に行き渡らせて自分の一部にしてしまう。だから分野を問わず全て自分の知識にしてしまえるのである。

さて、漱石の小説は本格デビュー時から物理学・数学・美術・文学手法・宗教・政治とあらゆる知識のお披露目宝庫である。それらを押し付けがましくなく小説の筋に自然に取り入れてしまったのが偉大である。更にその地下広場は『吾輩は猫である』ではソクラテス中心のギリシャ哲学―『草枕』ではウィリアム・ジェームズ(William James 1842.1.11～1910.8.26)のプラグマティズム(Pragmatism 実用主義)―『虞美人草』ではレオパルディと哲学のオンパレードである。但し『猫』と『虞美人草』が哲学自体の解釈を現実と照らし合わせて論じているのに対し、『草枕』では哲学そのものを論じるのではなく、その哲学の「文学手法転用」を行なった。展開的に見て『猫』を広いと形容するならば『虞美人草』は深く『草枕』は濃いといえるだろう。漱石は画工と那美さん、大徹和尚の言動を通して「意識の流れ描写」を実践して見せた。

漱石は『草枕』第 11 章の観海寺へ向かう画工のそぞろ歩きの場面で『トリストラム・シャンデー』(スターン)を挙げて『かく者は自己であるが、かく事は神の事である。従って責任は著者にはないそうだ。余が散歩もまたこの流儀を汲んだ、無責任の散歩である』と前置きして、信仰する神を持つことなく自力で神と一体になる無意識世界の描写を実現して見せた。そのスタンスで「意識とは現在の体系の一部」即ち「意識は現在のみにあるのではなく動的なイメージや観念として時間的継続の中にある」という哲学を転用した「主観的な思考や感覚を注釈なしに記述していく」文学手法を使って「個人の継続的意識の流れは他者にはわからない」のにそれを嗤う者の低俗を痛烈に批判するのである。ここでは「かく者」が自己なら「かく事」も自己の事である。

そして第 12 章では「藝術家の資格」を語る。観海寺の和尚のように何事にもとらわれない意識―純粋経験が藝術家には必要である。画工は非人情の世界にあって初めてその純粋な視点を得られ芸術家の資格を持てるのである。またこの章でふと想起したことがある。それは「裸体画問題」だ。「裸体」を人情で見れば「卑猥」であり、非人情で見れば「藝術」である。そこに没風流漢と藝術家の「意識階層」の相違がある。

そして那美さんの所作を採り上げる。「無意識も過去の経験から得た知識が現在に結合した意識」であり「まず目的観念があって、それを実現する観念が体系づけられ行動になって意思が完結する」とすれば、那美さんの常住芝居は彼女の意思に他ならない。那美さんの所作は美しい。表面が美しくても本心に沿わない行為を偽善という。更に芝居をしていることに気付いていなければ「無意識の偽善」である。時間体系の一部である過去の抑圧から生まれたその行為は「憐れ」という純粋経験の一瞬に姿を消した。その純粋な「憐れ」の一点が、彼女の表情を占めていた精神の迷いを統一した現在の意識の焦点であり、藝術としての画を成就させる要素なのである。(2013.4.19)